

## 万葉集東歌の類歌をめぐって

群馬県立女子大学 北川 和秀

◎万葉集の類歌（あるいは類句歌）をリストアップした先行研究

- ① 佐佐木信綱氏『萬葉集の研究 第三 萬葉集類歌類句攷』（岩波書店。昭和二十三年七月）
- ② 大久間喜一郎氏「万葉類句歌考―作者未詳歌を中心として―」（『明治大学教養論集』六十一号 昭和四十六年一月）、「万葉類句歌よりみた作者未詳歌卷の性格」（『明治大学教養論集』八十四号 昭和四十九年一月）

- ③ 大久間喜一郎氏「万葉類句歌考（改訂版）」（『古代文学の伝統』笠間書院。昭和五十三年十月）（②の改訂版）

- ④ 水島義治氏「東歌類歌一覽」（『萬葉集東歌の研究』笠間書院。昭和五十九年二月）

\*安念 正氏「萬葉集の類歌類似句の提出する一二の問題」（『国語国文』五の五。昭和十年五月）

◎類歌・類句歌の定義・規準

【安念氏】

こゝに類歌と称するは短歌に冠せられ、類似句と称するは長歌に冠せられたものである。凡そ、類歌の定義限界などといふ問題は各人によつて異り頗る客観性に乏しいものであるから、ひと先づ、以下の私考を進めてゆく都合上、類似の多寡に従つた便宜的な分類を左に示しておくことにする。

- (一) 類句歌——二句の同句又は極めて酷似せる句を含むもの。但し枕詞は便宜によりふくめない。
- (二) 類想歌——二句の類句を含まずとも全体に想の似たもの。
- (三) 類型歌——内容の類似も有するが主として修辞上よりみて類するもの。
- (四) 類句類型歌——三句の類句を有するもの。又二句の類句を有しかつ或程度類型的なもの。
- (五) 類句類想歌——二句位の類句をふくみ更に類想のもの。
- (六) 類想類型歌——類句二句を有せずして想も型も似たもの。
- (七) 類句類想類型歌——句も想も型も共に類似せるもの。同歌、同歌の異伝も一括し、又序歌の想の類するものもこゝに入れた。四句類する類歌もかりにこゝにをさむ。

【佐佐木氏】

凡例

一、一句以上の類似を有する歌を抽出した。但、抽出の意義乏しと考へて省略したものもある。また、一句以上の類似ならでも、類歌とおぼしいもの、また類想歌を偶挙げたものもある。

枕詞による類句の歌は、少数を掲ぐることにした。

一、全く同じきを重出歌、いささか異なるを少異歌、他を類歌と分つた。

一、重出歌、少異歌、類歌は、それぞれの群に於ける初出のものによつて、巻の順に掲ぐることにした。故に、いづれが原歌であり、いづれが類歌であるかは、読者自ら明らかにされたい。

(上に掲げた類歌類句の引例中には、時代の順としたものがいささかある。)

一、各項の上に附した数字は、国歌大観及び新訓萬葉集等の番号、その上なるは巻数を示すもの、また長歌は長、旋頭歌は旋と註した。かつ、下に作者の名を挙げた。

一、或本歌、一本歌とあるのは、番号に括弧を附して採つた。左註及び割註に少異の部分指摘したものは、多くは之を省略した。

一、引用歌の文字は、なるべく古鈔本及び寛永本の本文によることにした。読者は、白文萬葉集、及び新訓萬葉集と照合せられたい。

【大久間氏】

類句歌の選定規準

(1) 重出歌は同一歌であるという見地から、これを類句歌とはしない。

(2) 佐佐木博士のいわゆる少異歌は、重出歌の伝誦的異伝であることが多いと見て、これを類句歌とはしない。

(3) 同一作者の作品における類句は、個人的慣用句と見て、これを類句歌として扱わない。

(4) 万葉の記事の中で、一本または或本に曰く、と記された歌と正伝としての歌の間における類句は問題としない。

(5) 問答歌相互における類句は、鸚鵡返しの表現と考へて類句性を認めない。

(6) 同一句が一句のみに限られている場合は、類句歌として扱わない。

(7) 枕詞は国民の平均的発想と考へて、枕詞を含む二句のみの同一句をもつ作品は、これを類句歌として扱わない。

(8) 短歌において四句まで同一句を有する場合は、前記の少異歌と同様の扱いをする。

【水島氏】

類歌の定義

二句以上の同一句又は類似句を有し、発想や表現が類似しているもの。但し一首全体の歌意が大きく違っているものは除く。

○三氏が認定した東歌関係の類歌（類句歌）数

佐佐木氏 五九組 一六四首 + α（αは「大君の命畏み」二六首）

大久間氏 一七組 三七首

水島氏 二六組 五八首

◎東歌における類歌の分類（私見）

A・重出歌（類歌としない）

\* a 相見ては千歳や去ぬる否をかも吾や然思ふ君待ちがてに（一一・二五三九）正述心緒（佐）（水）

b 相見ては千歳や去ぬる否をかも吾や然思ふ君待ちがてに 柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ

（一四・三四七〇）未勘国相聞（佐）（水）

B・歌意同じ・ほぼ地名のみの相違

① a 風早の三穂の浦廻を漕ぐ舟の舟人騒く波立つらしも（七・一二二八）羈旅・古集（佐）（大）（水）

b 葛飾の真間の浦廻を漕ぐ舟の舟人騒く波立つらしも（一四・三三四九）下総雑歌（佐）（大）（水）

② a 白細砂三津の黄土の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（一一・二七二五）寄物陳思★

b 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（一四・三五六〇）未勘国相聞★

③ a 入間道の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね（一四・三三七八）武蔵相聞（佐）（大）（水）

b 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（一四・三四一六）上野相聞（佐）（水）

c 安波峯ろの峯ろ田に生はる多波美蔓引かばぬるぬる吾を言な絶え（一四・三五〇一）未勘国相聞（佐）（大）

④ a 都武賀野に鈴が音聞ゆ上志太の殿の仲子し鷹狩すらしも（一四・三四三八）未勘国雑歌（佐）

b 美都我野に鈴が音聞ゆ上志太の殿の若子し鷹狩すらしも（一四・三四三八或本）（佐）

⑤ ますらをの鞆の音すなりものふの大 臣 楯立つらしも（一・七六）雑歌・元明天皇★

C. 歌意同じ・地名の相違。類似する語句は少ない

○ a 紀の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ子ゆゑに (一一・二七三〇) 寄物陳思★

b 麻久良我の許我の渡の韓楫の音高しも寝なへ子ゆゑに (一四・三五五五) 未勘国相聞★

D. 歌意同じ・ほぼ地名の有無の相違

① a 筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも (一四・三三五〇) 常陸雑歌 佐

b たらちねの新桑繭の衣はあれど君が御衣しあまた着欲しも (一四・三三五〇 或本) 佐

② a 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいぎ寝しめとら (一四・三四〇九)

上野相聞 佐 大 水

b 岩の上にい懸る雲のかのまづく人そおたはふいぎ寝しめとら (一四・三五一八)

未勘国相聞 佐 大 水

③ a 霞る富士の山傍にわが来なば何方向きてか妹が嘆かむ (一四・三三五七) 駿河相聞★

b 植竹の本さへ響み出でて去なば何方向きてか妹が嘆かむ (一四・三四七四) 未勘国相聞★

E. 男女用または男女間の問答

① a 相模嶺の小峯見かくし忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くな (一四・三三六二)

相模相聞 佐 水

b 武蔵嶺の小峯見かくし忘れ行く君が名かけて吾を哭し泣くる (一四・三三六二 或本) 佐 水

② a 上毛野平度の多杼里が川路にも兎らは逢はなも一人のみして (一四・三四〇五)

上野相聞 佐 水

b 上毛野小野の多杼里が安波路にも夫なは逢はなも見る人なしに (一四・三四〇五 或本) 佐 水

③ a 遅速も汝をこそ待ため向つ嶺の椎の小枝の逢ひは違はじ (一四・三四九三) 未勘国相聞 佐 水

b 遅速も君をし待たむ向つ嶺の椎の小枝の時は過ぐとも (一四・三四九三 或本) 佐 水

④ a 恋しけは袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ (一四・三三七六)

武蔵相聞 佐 水

b いかにして恋ひばか妹に武蔵野のうけらが花の色に出ずあらむ (一四・三三七六 或本) 佐 水

⑤ a 吾が面の忘れむ時は国はふり嶺に立つ雲を見つづ偲はせ(一四・三五・一五)

\* 阿我於毛乃和須礼牟之太波久尔波布利祢尔多都久毛乎見都追之努波西

未勘国相聞(佐) (大) (水)

b 面形の忘れむ時は大野ろにたなびく雲を見つづ偲はむ(一四・三五・二〇)

\* 於毛可多能和須礼牟之太波於野呂尔多奈婢久君母乎見都追思努波牟

未勘国相聞(佐) (大) (水)

※字音仮名「斯」「西」「抱」は、卷十四の原資料の表記の名残りであると説がある。

植松茂氏「万葉集卷十四に於ける斯・西の仮名について」(『国語と国文学』十四の六。昭和十二年六月)、福田良輔氏「仮名字母より見たる萬葉集卷十四の成立過程について」(『萬葉』五。昭和二十七年十月)

該当する歌は二十九首。

※この項の①から④は或本歌。大久間氏がこれらを拾っていないのは、氏の選定規準「(4)万葉の記事の中で、一本または或本に曰く、と記された歌と正伝としての歌の間における類句は問題としない。」に拠るものであろうが、こういった例を見れば、その当否には疑問がある。

#### F. 歌意同じ・二種の合体

① a 谷狭み峯辺に延へる玉葛延へてしあらば年来ずとも(一二・三〇六七) 寄物陳思(佐) (大) (水)

b 丹波道の大江の山の真玉葛絶えむの心わが思はなくに(一二・三〇七一) 寄物陳思(佐) (大) (水)

c 谷狭み嶺に延ひたる玉葛絶えむの心わが思はなくに(一四・三五〇七) 未勘国相聞(佐) (大) (水)

② a 天皇の御命かしこみ 柔びにし 家をおき……(一・七九) 雑歌・作者不明(佐)

b 大君の命畏み愛し妹が手枕離れ夜立ち来のかも(一四・三四八〇) 未勘国相聞(佐)

c 障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやに悲しも(二〇・四四三二) 昔年防人★

d 大君の命畏み愛しけ真子が手離り島伝ひ行く(二〇・四四一四) 武蔵防人(佐)

③ a わが船は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり(三・二七四) 羈旅・高市黒人★

b わが舟は明石の湖に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり(七・一二二九) 羈旅・古集★

c 夏麻引く海上瀉の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず(七・一一七六) 羈旅(佐) (大) (水)

d 夏麻引く海上瀉の沖つ洲に船はとどめむさ夜更けにけり(一四・三三四八)

上総雑歌(佐) (大) (水)

④ a 珠衣たまきぬのさゝるさゝるしづみ家の妹いもにも言はず来て思ひかねつも (四・五〇三)

相聞・柿本人麻呂佐 大 水

b あり衣きぬのさゝるさゝるしづみ家の妹いもにも言はず来来にて思ひ苦ししも (一四・三四八一)

柿本朝臣人麻呂の歌集の中に出づ、上に見えたり。 未勘国相聞佐 水

c 水鳥みづとりの立たむよそひに妹いものらにも言はず来来にて思ひかねつも (一四・三五二八)

未勘国相聞佐 大 水

d 水鳥みづとりの立ちいの急いきに父母ちちにも言まず来来にて今ぞ悔くしき (二〇・四三三七) 駿河防人佐 大 水

⑤ a 朝霞あさぎりたなびく山やまを越こえて去いなば吾わがは恋こひむな逢あはむ日ひまでに (一二・三一八八) 悲別歌★

b 雲居くもいなる海山うみやま越こえていい行きなば吾わがは恋こひむな後のちは逢あひぬとも (一二・三一九〇)

悲別歌佐 大 水

c 東路とうろの手兒てのこの呼坂よびさか越こえて去いなば吾わがは恋こひむな後のちは逢あひぬとも (一四・三四七七)

未勘国相聞佐 大 水

⑥ 大船おほぶねの思おもひたのみし君きみが去いなば吾わがは恋こひむな直ただに逢あふまでに (四・五五〇)

相聞・作者未詳★

⑦ 明日あしたよりは吾わがは恋こひむな名欲なほり山石いは踏ふみ平ならし君きみが越こえ去いなば (九・一七七八) 相聞・娘子★

⑧ みさごゐる渚すずにいる舟ふねの漕こぎ出いなばうら恋こしけむ後のちは逢あひぬとも (一二・三二〇三)

悲別歌佐

G・歌意同じ・語句の異同は伝誦過程に生じたか

① a 遠とほくありて雲居くもいに見みゆる妹いもが家いへに早はやく至いたらむ歩あめ黒駒くろこま (七・一二七一)

行路・柿本人麻呂歌集佐 大 水

b ま遠とほくの雲居くもいに見みゆる妹いもが家いへにいつか到いたらむ歩あめ吾わがが駒こま (一四・三四四一)

柿本朝臣人麻呂の歌集に曰はく、遠くして。又曰はく、歩め黒駒 未勘国雑歌佐 大 水

② a よしよしよやし恋こひじとすれど木綿よか間山まやま越こえにし君きみが思おもほほらくくに (一二・三一九一) 悲別歌佐

b 恋こひつつも居をらむとすれど木綿よか間山まやま隠かくれし君きみを思おもひかねつも (一四・三四七五)

未勘国相聞佐

③ a くへ越こしに麦あ食をむ小馬こまのはつはつに相見あひ見みらしあやに愛あしむも (一四・三五三七)

未勘国相聞佐 水

b 馬柵うま越こし麦あ食をむ駒こまのはつはつに新膚にひ触ふれし見みろし愛あしむも (一四・三五三七 或本) 佐 大 水

⑨ 馬柵うま越こしに麦あ食をむ駒こまのの置おけらゆれどなほし恋こしく思おもひかねつも (一二・三〇九六)

寄物陳思佐 大 水

④ a 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや (一四・三三六〇)

伊豆相聞 佐

b 伊豆の海に立つ白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ

(一四・三三六〇或本) 佐

⑤ a 諾児なは吾に恋ふなも立と月の流なへ行けば恋しかるなも (一四・三四七六) 未勘国相聞 佐

b 諾児なは吾に恋ふなも立と月の流なへ行けど吾行がのへば (一四・三四七六或本) 佐

⑥ a 広橋を馬越しがねて心のみ妹がり遣りて吾は此処にして (一四・三五三八) 未勘国相聞 佐

b 小林に駒を馳ささけ心のみ妹がり遣りて吾は此処にして (一四・三五三八或本) 佐

H・歌意同じ・語句の異同は人為的か

① a わが背子を何処行かめとさき竹の背向に寝しく今し悔しも (七・一四一二) 挽歌 佐 大 水

b 愛し妹を何処行かめと山菅の背向に寝しく今し悔しも (一四・三五七七)

未勘国挽歌 佐 大 水

② a 韓衣裾のうち交へあはねども異しき心を吾が思はなくに (一四・三四八二)

未勘国相聞 佐 大 水

b はろばろに思ほゆるかも然れども異しき心を吾が思はなくに (一五・三五八八)

遣新羅使人 佐 大 水

c あらたまの年の緒長く逢はざれど異しき心を吾が思はなくに (一五・三七七五)

中臣宅守 佐 大 水

参 人眼多み逢はなくのみそ情さへ妹を忘れてわが思はなくに (四・七七〇) 相聞・大伴家持 ★

参 赤らひく膚も触れずて寝たれども心を異しくわが思はなくに (一一・二三九九)

正述心緒・柿本人麻呂歌集 佐

参 韓衣裾のうち交ひあはなへば寝なへの故に言痛かりつも (一四・三四八二或本) 佐 水

③ a 妹もわれも清の河の河岸の妹が悔ゆべき心は持たじ (三・四三七) 挽歌・河辺宮人 佐 大 水

b さ寝ぬ夜は千夜もありともわが背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ (一一・二五二八)

正述心緒 佐 水

c 鎌倉の見越の崎の石崩の君が悔ゆべき心は持たじ (一四・三三六五) 相模相聞 佐 大 水

④ a 夕ゆふ占うらにも占うらにも告つれる今夜こよひだに來きまさぬ君きみを何なに時ときとか待まちたむ (一一・二六一三) 正述心緒佐  
b 夕ゆふ占うらにも今夜こよひと告つらるわが背せなは何なにそも今夜こよひ寄よしる來きまさぬ (一四・三四六九) 未勘国相聞佐

\* 崩岸あづまの上うへに駒こまをつなきて危あやほかと人妻ひとつま児ころを息いきにわがする (一四・三五三九) 未勘国相聞★  
\* 安受あず乃の宇う敞へ尔に古馬こま乎をつなきて安夜あや抱まかど比ひ等と豆麻ま古呂ころ乎を伊吉いぎ尔に和わ我が須す流る  
⑤ 崩岸あづま辺へから駒こまの行ゆごのす危あやはとも人妻ひとつま児ころを目まゆかせらふも (一四・三五四一) 未勘国相聞★  
\* 安受あず倍へ可か良ら古麻こま乃の由ゆ胡こ能の須す安あ也や波は刀と文ひ比と登と豆麻ま古呂ころ乎を麻ま由ゆ可か西せ良ら布ふ母も 未勘国相聞★

I. 歌意同じ・語句の一致は僅少(「類想歌」と呼ぶべきか)

① a 晚ひるし蟬せみは時ときと鳴なけども片恋かたこいに手弱てよわ女をわれば時ときわかず泣なく (一〇・一九八二) 夏相聞佐

b 咲さく花はなは過すぐる時ときあれどわが恋こいふる心こころのうちは止とむ時ときもなし (一一・二七八五) 寄物陳思佐

c 伊香保風吹いこうほかぜく日吹ひふかぬ日ひありといへど吾わがが恋こいのみし時とき無なかりけり (一四・三四二二) 上野相聞佐

d 韓亭かんてい能許のこの浦波うら立たぬ日はあれども家いへに恋こいひぬ日は無なし (一五・三六七〇) 遣新羅使人佐

e 荒津あらかづの海潮うしほ干潮ひ満みち時ときはあれどいづれの時ときかわが恋こいひざらむ (一七・三八九一) 大伴旅人の廉従等 悲傷羈旅佐

② a 吾妹子わがむすめは釧くしにあらなむ左手ひだりのわが奥おくの手に纏まときて去さなましを (九・一七六六) 相聞・振田向宿祢佐

b 置おきて行いかば妹いもうとばまかなし持もちて行く梓すゐの弓ゆみの弓束ゆみにもがも (一四・三五六七) 未勘国防人歌佐

c わが背子せごは玉たまにもがもな手に巻まきて見みつつ行いかむを置おきて行いかば惜あはし (一七・三九九〇) 大伴家持佐

d 父母ちちうはも花はなにもがもや草枕くさまくら旅たびは行くとも捧たごて行いかむ (二〇・四三二五) 遠江防人佐

e 母刀あまと自じも玉たまにもがもや頂みづらきて角髮みづらのなかにあへ纏まとかまくも (二〇・四三七七) 下野防人佐

③ a たまきはる命いのちに向むかひ恋こいひむゆは君きみがみ船ふねの楫柄かぢからにもが (八・一四五五) 春相聞・笠金村佐  
b おくれ居ゐて恋こいひば苦くるしも朝狩あさかりの君きみが弓ゆみにもならましものを (一四・三五六八) 未勘国防人歌佐

c 家いへにして恋こいひつつあらずは汝なが佩ひける大刀おほやぶらになりても齋いひてじかも (二〇・四三四七) 上総防人の父佐



④ a 淡海の海沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ益れ (一一・二四四五)

寄物陳思・柿本人麻呂歌集★

b 上毛野伊奈良の沼の大藺草よそに見しよは今こそ益れ

柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ

(一四・三四一七) 上野相聞★

⑤ a あちかまの可家の水門に入る潮のこてたずくもか入りて寝まくも (一四・三五五三)

未勘国相聞★

b 妹が寝る床のあたりに石ぐる水にもがもよ入りて寝まくも (一四・三五五四)

未勘国相聞★

⑥ a 思ひ出でて哭には泣くともいちしろく人の知るべく嘆かすなゆめ (一一・二六〇四)

正述心緒★

b 恋しけは袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ (一四・三三七六) 武蔵相聞★

《参考》「くずはくまし」のパターンの歌(「類型歌」と呼ぶべきか)

\* ⑥ かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを(二・八六) 磐姫皇后

⑥ 吾妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを(二・一二〇) 弓削皇子

⑥ かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして(四・七二二) 大伴家持

⑥ ことしげき里に住まらずは今朝鳴きし雁に副ひて往なましものを(八・一五一五) 但馬皇女

⑥ なかなか人にあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり(一二・三〇八六)

⑥ 後れみて恋ひつつあらずは紀伊国の妹背の山にあらましものを(四・五四四) 笠金村

⑥ 外にゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを(四・七二六)

大伴坂上郎女

⑥ 後れみて長恋ひせずは御園生の梅の花にもならましものを(五・八六四) 吉田宜

⑥ かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを(一一・二六九三)

⑥ 後れみて恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る(一二・三二〇五)

J. 歌意が異なる・一部の語句が一致(「類句歌」と呼ぶべきか)

① a 奥山の真木の板戸を押し開きしゑや出で来ね後は何せむ(一一・二五一九)

〈出てきて欲しい〉

正述心緒(佐)(大)(水)

b 奥山の真木の板戸を音速み妹があたりの霜の上に寝ぬ(一一・二六一六) 正述心緒(佐)(大)(水)

〈開けられない〉

c 奥山の真木の板戸をとどとしてわが開かむに入り来て寝さね(一四・三四六七)

〈入ってきて欲しい〉

未勘国相聞(佐)(大)(水)

② a あぢの住む渚沙の入江の荒磯松吾を待つ児らはただ一人のみ(一一・二七五一)

〈私を待つ児は一人だけ〉

寄物陳思(佐) (大) (水)

b あぢの住む渚沙の入江の隠沼のあな息づかし見ず久にして(一四・三五四七)

〈息がつまりそう。逢っていないから〉

未勘国相聞(佐) (大) (水)

③ a さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如(一四・三三五八) 駿河相聞(佐) (水)

〈共寝をするのは少ない。恋する思いはたくさん〉

b ま愛しみ寝らくはしけらくさ鳴らくは伊豆の高嶺の鳴沢なすよ(一四・三三五八 或本) (佐) (水)

〈共寝をするのはしょっちゅう。噂もたくさん〉

c 逢へらくは玉の緒しけや恋ふらくは富士の高嶺に降る雪なすも(一四・三三五八 一本) (佐) (水)

〈逢うことは少し。恋する思いはたくさん〉

④ a 足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくもあやし(一四・三三六四)

〈恋が成就したのに逢わないのはおかしい〉

相模相聞(佐) (水)

b 足柄の箱根の山に蔓ふ葛の引かば寄り来ね心なほなほに(一四・三三六四 或本) (佐) (水)

〈さそつたら、心素直に寄って来て欲しい〉

⑤ a 誰そこのわが屋戸に來喚ぶたらちねの母に噴はえ物思ふわれを(一一・二五二七)

正述心緒(佐)

b 誰そこの屋の戸押そぶる新嘗にわが背を遣りて齋ふこの戸を(一四・三四六〇)

未勘国相聞(佐)

⑥ a 足柄の土肥の河内に出づる湯の世にもたよらに児ろが言はなくに(一四・三三六八)

相模相聞(佐)

b 筑波嶺の岩もどろに落つる水世にもたゆらにわが思はなくに(一四・三三九二)

常陸相聞(佐)

K・歌体が異なる・語句は一部のみ一致(類歌とはしない)

\* 遠妻の ここにあらねば

玉梓の

道をた遠み

思ふそら

安けなくに

嘆くそら

安から

ぬものを 中空行く

雲にもがも

高飛ぶ

鳥にもがも

明日行きて

妹に言問ひ わがた

めに 妹も事無く

妹がため

われも事無く

今も見ること

副ひてもがも

(四・五三四)

相聞・安貴王★

◎ 中空行く雲にもがも今日行きて妹に言問ひ明日帰り来む(一四・三五一〇) 未勘国相聞★

※万葉集中、「雲になれたら」とうたうものはこの二首のみ。

「今日行って、明日帰ってくる」は、他に次の二首。

・…須臾は 家に帰りて 父母に 事も告らひ 明日のごと われは来なむと…

(九・一七四〇) 高橋虫麻呂

・百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は来なむを何か障れる(五・八七〇) 山上憶良  
いずれも、恋人に会うという内容ではない。

### ◎まとめ

①東歌の類歌を、佐佐木氏・大久間氏・水島氏のリストを参考に収集した。この三氏がリストに挙げていない類歌も何組か見出し得た。

②それらを、類似度とは別の観点から以下の通りに分類した。

- A. 重出歌(類歌とはしない)
  - B. 歌意同じ・ほぼ地名のみの相違
  - C. 歌意同じ・地名の相違。類似する語句は少ない
  - D. 歌意同じ・ほぼ地名の有無の相違
  - E. 男女用または男女間の問答
  - F. 歌意同じ・二種の合体
  - G. 歌意同じ・語句の異同は伝誦過程に生じたか
  - H. 歌意同じ・語句の異同は人為的か
  - I. 歌意同じ・語句の一致は僅少(「類想歌」と呼ぶべきか)
  - J. 歌意が異なる・一部の語句が一致(「類句歌」と呼ぶべきか)
  - K. 歌体が異なる・語句は一部のみ一致(類歌とはしない)
- ③巻十四において、本歌と或本歌との関係は、「E・男女用または男女間の問答」「G・歌意同じ・語句の異同は伝誦過程に生じたか」の二項目が多数を占める。